

～開かれた学校、今、学校に求められるもの～

「新しい学校づくり」をめざして

株式会社ハニーズ代表取締役社長 江尻 義久 氏…… 1

発信 ～センターは 今～

学校組織マネジメント研修とは？	教科外教育チーム……………	3
新講座紹介「小学校英語指導者講座」	教科教育チーム……………	6
自主講座紹介「先生のための和楽器教室」	教科教育チーム……………	7
「AD/HDの理解と対応講座」	教育相談チーム……………	8
平成16年度親子サイエンス	……………	9
教育課程（届）調査速報	教育調査チーム……………	10
「福島県の情報教育の実態等に関する調査」結果報告	……………	
	情報教育チーム……………	11
「実践 学校教育相談」チームでかわる	……………	
～抱え込みから支え合いへ～	教育相談チーム……………	12

特集

外部講師の講演から	……………	16
-----------	-------	----

人・道・歩み

緑あふれる生活を提案する	有限会社花雅 渡部きん子氏に聞く……………	26
--------------	-----------------------	----

長研だより

授業を変える 学校を変える教育研究	平成16年度長期研究員……………	27
-------------------	------------------	----

研修の風景

職能研修から ～中・高進路指導研修会・免許外教科担当教員研修会～	企画振興チーム……………	28
----------------------------------	--------------	----

随想

ガーナの子どもたちから学ぶこと～共に生きる力～	教科教育チーム指導主事 黒川 佳子……………	30
-------------------------	------------------------	----

豊かな教育実践

英語の美しい花を大きく咲かせるために	……………	
A natural to learning English in Japanese Elementary School	……………	
大熊町教育委員会英語指導助手 根本アリソン	……………	
相馬市教育委員会社会教育主事（前大熊町立熊町小学校教諭）木村 恵子……………		31

授業に生きる資料

中学校・高等学校における入門期の漢文指導の工夫	教科教育チーム指導主事 中根 猛……………	34
-------------------------	-----------------------	----

おしらせ

実践に役立つ教育資料 ～最近の研究紀要・資料から～……………		36
平成16年度 福島県教育研究発表大会のご案内		



～開かれた学校、今、学校に求められているもの～

「新しい学校づくり」をめざして

株式会社ハニーズ
代表取締役社長 **江尻 義久**

学校教育の目的は、いずれ社会に飛び立つために必要な基礎知識を身に付けさせるためにあると思います。

卒業と同時に間髪を入れずに就職する現状では、早いうちから自ら職業選択に関する意識を持ち、自分の能力や興味のある分野を明確にしていかなければいけません。そのためには個別のカウンセリング等も行いながら、社会や企業に通用する能力や心構えを身に付けさせていく必要があると思います。

現在の学校教育は学問の知識を身に付けることに主眼を置いているようですが、良い成績で卒業し、有名高校や有名大学を卒業したからといって、かならずしも社会に、そして企業に通用するものではありません。社会に出て求められるのは、コミュニケーション作りやチームワーク作り、そしてリーダーシップ等の能力なのです。

また、日々変化の激しい現代において、機敏な対応と新たな状況にも柔軟に対応できる資質も求められます。このような資質は社会に出るから身に付けられるものではなく、幼い時期にクラスメートや友人等を通じて養われるものと思われれます。

少子化が問題視されている中、兄弟や地域での遊び仲間の減少、上級生や下級生との付き合いの希薄により、周囲とのコミュニケーションや自己主張のあり方、適切な対応の仕方が分からなくなりつつあると思われれます。

教壇から一方的に教科書にそってただ知識を詰め込む教育よりも、自らが参加し意見を述べ、考える力を養えるディスカッションを多く取り入れた方が、生徒自ら問題意識を持ち、問題を

解決するための手段について考える力を身に付けさせる良い方法だと思います。

学校教育の一環として「どうして勉強しなければならないのか?」「なぜ悪いことをしてはいけないのか?」「社会に役立つ人間になるためにはどうすればよいか?」など、様々なテーマを与え、5～6人のグループでディスカッションをさせてみてはどうでしょうか。

ディスカッションの結果を項目ごとにまとめて発表させ、グループごとに優劣を競い合い、それぞれの項目で参考になる部分を抜き出して評価し合うのです。この作業の繰り返しで自然にチームワークが生まれ、より良いコミュニケーションや自己主張も出てきて、参加意識も高まってくるでしょう。同じ世代で相手が何を考えているかも理解ができ、有意義なものになると思います。

また、物事に対する基本的な理解が深まり、「なぜ?」「どうして?」の疑問も自ら解けるようになります。それを繰り返すことで興味や関心が湧き、勉強への面白みも出てくるのではないのでしょうか。

最近では企業の新卒採用も減少し、就職を希望しても就職できない人が数多くいます。少子化時代にもかかわらずこのような状況にあるのは大変残念なことです。

こうした社会現象を背景に正社員ではなくフリーターと呼ばれる、アルバイト的な雇用形態で働く若者が増加しております。確かに様々な経験を通じて自分に合った仕事を見付けられる可能性もあります。しかし反面、本人がよほどしっかりとした目的意識を持たないと流されてしまう可能性もあります。

～開かれた学校、今、学校に求められているもの～

な目標を実現させる手助けをすることもまた、教育の一環であると思います。

ビジネスも学校教育も従来通りのやり方では進歩がありません。変化する時代を読み、新しい方法を模索し果敢に実行することが大切なのです。最初から上手くいくことは何一つなく、試行錯誤を繰り返し、失敗を重ねながら進化し、進歩するものなのです。「社会に役立つ人間を育てるにはどうするか。」その目標に向かって試行錯誤を繰り返すのです。

教育とはとても重要で難しく、人類社会にとって永遠のテーマでもあります。個々の持つ本質的な能力や感性の違いを無視し、一律に教え、育むという矛盾を内包しながら、ますます多様化、複雑化する社会へ限られた期間で送り出さなければなりません。そのような状況の中で、これからの教育に必要なのは、まず「個々の芽をいかに伸ばすか」その教育のあり方を考えることではないでしょうか。同じ教育を受けても受け取り方は様々に違うのです。それらを画一的に捉えるケースとそうでないケースとがあります。決して答えは一つではないのです。

会社を経営する経営者の目的は同じですが、経営方法は多種多様です。それでも目的が同じであれば経営は成功します。それぞれの分野で成功している経営者は、いずれも個性が強く、簡単には妥協しない人がほとんどです。

是非、画一的でなく、個々が生き生きと登校し、たった一度の青春時代を楽しく過ごせる個性を育む学校教育を模索していただきたいものです。

●江尻義久氏のプロフィール●

1946年いわき市生まれ。早稲田大学第一文学部卒業。

1978年創業、ヤングカジュアルファッション販売を全国展開する、株式会社ハニーズの代表取締役社長を務める。

社会に順応できず働けない、働かない若者が増えつつあります。その原因としては、現状をなかなか受け入れられず現実から逃避したり、行動を自分で決められず依存することに慣れてしまっていることが考えられます。そして何をやっても「仕方がない」とあきらめてしまい、手の届く範囲の興味のあるものだけで満足しているように見受けられます。

しかし、そのような自分を把握していながら、反面、注意されると落ち込んだり、逆に暴力や暴言で反抗したりする傾向があります。このような状態を是正するには、自ら考え、自らの意思で目標を捉え、自ら行動できる人間に育つように導かなければなりません。新しい教育のあり方として、改めて試行錯誤を始める必要が感じられます。

実社会においては、仮に知識や経験がなくても多くの手段を使って成果を上げることは可能であり、より正確な専門的知識を得られる時代でもあります。知識よりもそれらを結び付け、応用する能力を問われるのが社会であり企業です。

仕事とは与えられるものでなく、自ら見付け出すものだと思います。勉強もまた同様です。受け身で何の必要があるのか知らずに強要されても、ただ拒否反応を起こすだけです。必要性を理解すれば自ら勉強もするようになるはずで

す。また、社会においても責任ある立場に立つことによって初めて、仕事の本質が見えてくるのですが、積極的に責任ある立場に立ちたいと思う人は現在少なくなりつつあるように思われれます。「少年よ、大志を抱け」という有名な言葉がありますが、社会が進化し、複雑になればなるほど、またその門戸が近づけば近づくほどに、自らをコンパクトにまとめて妥協してしまう傾向にあるのは残念です。

次の世代を背負うのは自分たち世代であるという意識を持つこと。その自覚が早ければ早いほど、それぞれの分野で責任ある立場に立つことができるはずで

学校組織マネジメント研修とは？

主任指導主事 原田 宏 明

1 教科外教育チームとは？

「教科外教育チームって何をやってるところなんですか」という質問を度々いただきます。わかりやすいキーワード1つでお答えできないのが残念ですが、要は「教科」に属さない領域の研修を扱っている所なのです。具体的には、管理職研修、マネジメント研修、ミドルリーダー研修、特別活動研修、道徳研修、生徒指導・特別活動研修、総合的な学習に関する研修などです。その他、初任者研修や経験者研修といった基本研修などの一部も担当しますし、依頼に応じて、教育事務所の研修や校内研修へも出かけています。その中で、今回は、教育界で今、全国的に注目を集めている「学校組織マネジメント研修」についてご紹介したいと思います。

2 組織マネジメントに関する誤解

「学校に組織マネジメントの発想を導入し…」という項目が教育改革国民会議報告の「教育を変える17の提案」に盛り込まれて4年近く経過し、近頃、教育を論じる場で「組織マネジメント」という表現が様々な人の口にのぼるようになりました。しかし、筆者の知る限りでは、その意味が誤解されて用いられている場合が少なくないように感じられます。その誤解のワースト3を挙げれば、

- (1) マネジメントというのだから、要するに、学校管理を強化していくことだろう
 - (2) 組織マネジメントというのは、企業の論理を学校に当てはめていくことだろう
 - (3) 組織マネジメントというのは、管理職の仕事だろう
- ということではないかと思えます。これらは全

くの誤解にすぎないのですが、それは「組織マネジメント」というその表現を耳にした人が、自分勝手に想像したイメージで、言わば、思い込みで発言するからなのでしょう。

3 組織マネジメントとは？

(1) 学校組織マネジメントとは？

そもそもマネジメントとはどういう意味なのでしょう。少なくとも、マネジメント＝管理、経営、ではないと30年以上英語に関わってきた筆者は思います。無理を承知で敢えて和訳すれば、大和言葉の「やりくり」が一番近いように感じます。いずれにせよ、組織マネジメントという発想を日本の教育界に導入し、開発するに当たって、国立教育政策研究所等の研究者がキーワードであるマネジメントという英語を日本語に翻訳しなかったのは、この語にぴったり当てはまる日本語はないと判断したためと考えられます。

そのマネジメントという語に学校組織という語が付け加えられた「学校組織マネジメント」は学校という組織のために新たに開発されたものなのです。その中核をなす発想は、ミドル・アップ・ダウン・マネジメントと呼ばれるもので（説明は割愛）、決して管理職がいかに学校組織を強力にコントロールしていくかということではありません。ちなみに文部科学省に著作権のあるテキストによれば、学校組織マネジメント（以下、組織マネジメントと表記）を次のように説明しています。

→学校内外の能力・資源を開発・活用し、学校に
関与する人たちのニーズに
適応させながら、
学校教育目標を達成していく過程（活動）

(2) 組織マネジメントは企業の発想を学校に導入することか？

そうではありません。教育界で用いる組織マネジメントは前述したように、学校組織のために開発されたプログラムですので、むしろ、学校と企業の違い、それぞれの組織の長所・短所を明確に理解したところからスタートすることになります。ただ、もし企業という組織の持つ長所を学校が取り入れられるならば、それもいではないかという柔軟性も組織マネジメントの発想の中にはあります。何せ、大企業の側でさえ、学校という組織の持つ長所に注目し、それを積極的に取り入れるところが出始めるほど、今や、柔軟性が必要とされる時代ですから。

(3) 組織マネジメントは管理職だけのものか？

学級王国などという言葉に代表されるように、これまでの学校は、ややもすると教師個人個人の力がバラバラに発揮されやすいという面がありました。このバラバラの力を束ねて方向性をもたせ、学校全体の教育目的に向かう大きな力に変えるには、管理職のみならず総ての教職員が常に組織を意識して共通目的に向かうという組織マネジメントの発想が必要です。

例えば学級担任にしても、自分の学級をどうまとめていくかだけでなく、あくまでも学校全体のビジョンと関連させた学級のマネジメントをも常に意識する必要があります。ですから、組織マネジメント研修は当然のことながら、管理職のみならず一般教職員も総て受講するのが最も望ましいのです。もし、一つの学校の教職員全員が受講すれば、その効果はますます高まるに違いありません。

4 「学校経営」とどう違う？

それでは、組織マネジメントは従来の学校経営とはどこが違うのでしょうか？簡単に言えば、これまでの学校経営では問題点を見つけ、反省し、それを改善していくというやり方でした。確かに、大きな変化が起こらない時代には、基

本的に前例踏襲をし、改善点を加えていくというこのやり方でも十分だったのでしょう。しかし、学校独自の特色や創造性までもが求められる時代にあつては、問題点を改善するだけではただ普通になることを意味するだけであり、特にそれが学校の特色や魅力となる訳ではないということになります。

それに対して組織マネジメントでは、欠点あるいは弱みに注目するのではなく、むしろ積極的に強みの発見をし、それを活かしていくという発想が採られています。こう言ってしまうと簡単そうに聞こえますが、とかく劣っている部分に目を注ぎ、反省、改善し、横並びすると安心するという傾向を持つと言われる日本人には、なかなか難しい発想法と言えるでしょう。ですから、マネジメント研修を受けるというのは、ある意味では、ものの見方を変える、発想法が変わるという体験ですから、いわゆる「目からウロコ」的体験をすることになります。

5 「学校経営・運営ビジョン」も「学校評価」も組織マネジメントとの関連で

組織マネジメント研究・開発の第一人者である国立教育政策研究所総括研究官の木岡一明氏は、組織マネジメント説明会で、ある県からの参加者から出された「本県では組織マネジメントはまだ実施していないが、まず話題になっている『評価』から始めたい。どのようなことに気をつければよいか」という質問に答えて、次のように述べていました。

—これからの学校経営は、組織マネジメント理論に則り、校長がまず明確な教育目標や経営ビジョンを示す。次に組織マネジメントの手法を用いてその実現を図る。その次に学校の評価や教員の評価をする。そういったチェックを次の活動へ反映させるという組織マネジメントのサイクルを進めるべきであり、このサイクルを無視し、評価から始めるというのでは、失敗は目に見えている。何のために評価をするのかと

いう根本的なことが分かっていないで評価を始めるというのでは、評価のための評価にしかない——

今、話題の「ビジョン」「評価」などをどう考えるべきかという答えが、木岡氏のこの発言に示されています。そもそも、それらの手順を示しているP-D-C-Aというマネジメント・サイクルも学校現場へは組織マネジメント理論を通して紹介されてきた訳ですから、そのサイクル上にある「評価」等を効果的に進めるためには、やはり、組織マネジメント理論をしっかりと理解することが肝要です。

6 組織マネジメント研修の全国的な広がり

この組織マネジメントというものの凄さは、いわゆる机上の空論ではないというところにあります。今、主流の理論とテキストは先程紹介した国立教育政策研究所の研究官らが中心となって開発してきましたが、特筆すべきは、研究者自らが全国の様々な学校現場での実践に立ち合い、その成否をすぐさま理論とテキストにフィードバックするという方法で改善が重ねられていることです。ですから、テキストには絶えず新鮮な内容が盛り込まれ、充実が図られているのです。いきおい、組織マネジメント研修の有効性・必要性もじわじわと認識されてきており、全国的な広がりを見せています。さらには文部科学省の強い後押しもあって、同研修に県全体で取り組み始めたところもあれば、市町村教委単位で全校が取り組むという動きも見られるようになってきました。ただ問題は、どの県でも状況は似ていますが、研修を担当する講師の育成にかなりの時間がかかるため、いまひとつ研修の普及のスピードアップが図れないということです。

7 組織マネジメント研修の内容は？

各県における組織マネジメント研修では、文部科学省が著作権を持つテキストを用いて進める

のが一般的です。そのテキストは今現在、2種類あります。1つは「これからの校長・教頭等のために」と題された管理職向けのものであり、もう1つは「すべての教職員のために」と題されたものです。内容の違いはといえば、前者は「ビジョンづくり」に重点が置かれています。つまり、管理職として自校の「ビジョン」をどう構築していったらよいのかということを中心として研修してもらう内容になっています。これに対し後者は「関係づくり」に力点が置かれています。例えば、教務主任として一人で悩み、黙々と仕事をこなしていくのではなく、周りに活用すべき資源がいかにか多く存在しているかに気づいてもらい、その効果的・効率的活用を考えてもらう内容になっています。

8 本県教育センターでの取り組みは？

当教育センターでも上記のテキストを用いた組織マネジメントに関する講座が開講されています。今年度の講座状況は、以下のようになっています。

- (1) 「組織マネジメント講座」
(校長対象1泊2日)
- (2) 「学校マネジメント講座」
(教頭対象1泊2日)
- (3) 「ミドルリーダー講座」
(小・中学校中堅教員対象2泊3日のうち、6時間がマネジメント研修)
- (4) 校内研修
(「出前講義」の形で)

来年度以降はこの組織マネジメントに関わる研修の対象者をさらに広げ、それぞれの学校の活性化、特色ある学校づくり、学校経営のビジョンづくりなどを強力に後押ししたいと考えておりますので、それらの研修に是非とも奮って参加していただきたいと思っております。

新講座紹介

小学校英語指導者講座

教科教育チーム 指導主事 黒 須 智 則

7月8日、9日の「小学校英語活動指導者講座」で実施した「子どもたちに経験させたい英語活動」のワーク・ショップの中から、研修の様子を紹介します。

講師には相馬市教育委員会（前大熊町立熊町小学校教諭）の木村恵子先生と大熊町英語指導助手（平成元年から本県の英語教育に関わり、昨年度から小学校専属で英語活動に尽力）の根本アリソン先生をお迎えしました。両氏は双葉郡の英語活動研究会を主宰するとともに「自然な言語習得」が図れるカリキュラムづくりと授業実践に努めており、その豊富な経験と見識をもとに、演習を中心とした研修を行いました。

①英語活動と自然な言語習得



日本における中学校での英語教育の経験とイギリスの小学校教員の免許を有するアリソン先生から、今の英語活動に必要なものについて、指導法や環境、教材等の多岐に渡ってわかりやすく説明していただきました。

研修者の声「アリソン先生と木村先生の息のあったご指導とゲームでのバリエーションの持

たせ方、とても勉強になりました。」

②子どもを育てるゲームの条件



研修者自身が児童となり、自己紹介をはじめ様々なゲームを行いました。英語活動を教師自身が楽しむことが子どもの積極的な態度を引き出します。



さらにカルタ取りゲームを通して、ゲームの意味と多様な可能性について研修を深めました。研修者の声「gameって奥が深いと思った。簡単なのに、子どもを育てる栄養がいっぱいあるものが一番大切だと気づきました。」

先生のための和楽器教室 箏・三味線講座

教科教育チーム 指導主事 石川千穂

I 講座のねらい

学習指導要領の改訂により、国際理解の観点から、我が国の伝統音楽の扱いが一層重視される中、授業実践に生かせる実践的な自主研修の場として、また、専門家と現場の先生方、そしてセンターがともに学校教育における和楽器の指導を考える場として、本講座を開設しました。

II 開催時期・場所

前中後の3期にわたり、第2週・第4週の土曜日に教育センターを会場に開催しています。

前期 5月・6月
中期 10月・11月
後期 1月・2月



箏講座

III 講座の概要

箏、三味線とも、受講者が自分のニーズに合わせて受講でき、2回で完結するコンパクトな講座を設けました。

1 箏入門講座

楽器の取り扱い方、基本奏法、「さくら」をはじめとした入門曲を学ぶ講座です。

2 箏スキルアップ講座

入門程度から一歩進んで、児童生徒の前で自信を持って弾くことができる、指導することができるレポートづくりの講座です。

3 箏授業実践講座

クラス授業での箏の扱い方や指導方法、レ

パートリー、十七弦の奏法を学びます。

4 三味線入門講座

楽器の扱い方、歴史、調弦の方法などの基本的な事項や奏法を身につけます。

5 長唄三味線入門講座（中期のみ）

長唄を通して、三味線のいろいろな奏法を身につけます。

6 民謡三味線入門講座（後期のみ）

伴奏楽器としての三味線の奏法を身につけ、郷土の音楽の魅力に迫ります。

IV 研修者の感想より（前期受講者）

○今回初めて箏をさわりましたが、とても楽しくスキルアップ講座も申し込みました。(箏入門)
○一曲を仕上げたという実感が持てすごく嬉しく思いました。(箏スキルアップ) ○楽譜を使わず口三味線で黒田節を覚えることができ感激した。短時間で本格的な部分まで教えていただけ良かった。(三味線入門)



三味線講座

V 次年度の予定

和太鼓・篠笛・尺八について開講予定です。

「AD/HDの理解と対応講座」

教育相談チーム

1 なぜ、自主講座なのか

さまざまな教育課題や学校週5日制等により、教師はより多忙になっているのではないだろうか。学びたいという意欲を持ちながらも学校を空けることができず、研修に参加することができない教師が多いのではないだろうか。

土曜日に日帰りの講座を開催すれば、上記のような教師も研修に参加できるのではないだろうか。

2 なぜ、AD/HDなのか

今、特別支援教育の推進が叫ばれている。普通学校、普通学級においても、LD、AD/HD、高機能自閉症など、特別な支援を要する児童生徒が全体の約6%程度の割合で在籍すると推定されている。

ただし、LD、AD/HD、高機能自閉症などの児童生徒に対して、正しく理解し適切に対応するためには、一人一人の教師が理解と対応についての基礎を学ぶ必要がある。

3 参加応募の状況

本講座は期日6月19日(土)、定員50名で参加者を募集した。それに対して、275名からの申し込みがあり、電話での問い合わせも合わせると参加希望者は300名を超えた。

そのため、午前の講義は定員を120名に拡大し、午後の事例研究も64名と定員枠を増やして実施することになった。

4 講座の内容

午前は理論編ということで、立正大学心理学部教授中田洋二郎先生を講師に迎え「AD/HDなど発達障害のある子どもへの関わりについて」の講義を実施した。午後は実践編ということで、実際の事例を取り上げ事例研究を行い、中田先生から指導助言を受けた。



5 受講者の感想

「特別支援教育という流れの中で、それぞれの障害の理論的な部分と実践での対応といった両面からのお話はとても参考になりました。通常の学級の生徒理解についても、これまでの一般的な生徒理解から、様々な角度から分析を加えて支援にあたっていくことが重要であると感じました。」

6 自主講座を終えて

本講座を実施するにあたっては、チーム員一同で深夜に及ぶ協議・準備を行うなどの苦労はあったものの、成果は大きかったと感じている。今後も受講しやすい講座、今日的課題に関する講座を検討し、実施していきたい。



平成16年度 親子サイエンス教室



夏休み中の2日間、福島県教育センターをメイン会場に、平成16年度「親子サイエンス教室」が開催されました。抽選で選ばれた福島県内の小学校の4年～6年の児童とその保護者20組(40名)を対象に実施されたもので、昨年からは始まり、今回で2回目です。

1 目的

科学の不思議やすばらしさを直接体験し、子どもたちの科学に対する興味・関心を高め、科学的な素養を育成する。また、親子がものづくりや自然体験を通して触れ合いを深め、科学に対する共通話題を持ち、日常的に科学が話題となる家庭作りの一助とするというものです。

2 期間

1日目／7月31日(土曜日) 12:30～20:30

2日目／8月1日(日曜日) 8:45～16:30

3 内容

7/31(土)

開講式・オリエンテーション

観察・実験(教育センターの実験室)

- 顕微鏡でミクロアドベンチャー
- ▽ うわっ、冷たい！アイスクリームを作ろう
- 表面効果翼船模型「ラム」の製作
- ◎ 太陽熱でクッキング！
- ◇ -200℃の世界
- ☆ 天体観測

8/1(日)

野外観察(浄土平へバスで移動)

- ▲ 火山を見てみよう

～吾妻小富士から見る火山観察

● 浄土平の植物観察

～自然を守る未来人になるために、
自然の中へ学びにでかけよう！

閉講式・受講修了証授与

4 参加者の感想から

[児童の声]

- ・とてもおもしろい実験や観察ばかりだったので楽しかった。
- ・実験や観察の間、家の人とたくさん話ができてよかった。

[保護者の声]

- ・家庭ではあまり子どもと話すチャンスがないが、一緒にいろいろな体験ができるよい機会だった。
- ・いろいろなプログラムがあり、とても有意義な2日間だった。
- ・普段なかなか体験できない実験や観察があり、参加してよかった。



今回も好評をいただきましたが、さらに内容を工夫していきたいと思っています。

教育調査チーム

総合的な学習の時間にみられる教育課程の工夫

教育課程(届)調査速報

教育課程(届)調査は、「学校の自主性・自律性の現状と課題を把握し、工夫された事例を紹介すること。カリキュラムセンターを展望し、県内全公立小・中学校、県立高等学校の教育課程をいつでも手に取れる環境づくりに努めること。」を目的に行っている調査です。

現在、小学校の教育課程(届)を調査中ですが、速報では、昨年12月の学習指導要領の一部改正で「一層の充実」が明記された総合的な学習の時間の全体計画や年間指導計画をどのような視点から分析し、工夫点を探しているかについて述べたいと思います。

1 編成方針や「総合的な学習の時間」の項、全体計画に目標が示されているか。

学習指導要領には教科等の目標、内容が示されています。しかし、総合的な学習の時間には3つのねらいが示されているだけで、目標も内容も明示されていません。教科等と違って各学校の自主性・自律性を発揮できるのが総合的な学習の時間です。児童生徒に身に付けさせたい力である「目標」(身に付けさせたい資質・能力)を明記しているか、その目標の種類は何かについて集計・分析しています。

2 「何を教えるか」「どう教えるか」の分かる「学習内容」が示されているか。

多くの学校で選択している児童生徒の興味・関心等に基づく学習でも、環境・情報等の横断的・総合的な課題についての学習でも、活動の中でどんな内容を実現することができるのかを予測し、見通しを持つことがなければ適切な支援を行うことができません。全体計画や年間指

導計画から学習内容が読み取れるかどうかについて調査しています。全学年の年間指導計画や各単元の指導計画に、教科等で身に付けた力との関連を明らかにしたり、地域の人材や地域の施設活用の可能性を記入したりして学習内容を分かりやすく作成している学校がありました。また、学習内容を学習指導要領のように資質・能力で記述してあると、それが評価規準になり、指導者によって教材や活動をいろいろと工夫して実践できることが分かりました。

3 教科発展型の学習内容を見直す。

総合的な学習の時間の3つ目のねらいである「知」の総合化の視点が一部改正で付加されました。各教科等で身に付けた知識や技能等と総合的な学習の時間での体験的な学習により「確かな学力」を育成するということが明示されました。これまでクロス・カリキュラム等で教科と総合的な学習の時間で単元をつくるという取り組みがなされていましたが、教科と総合的な学習の時間を分けて考えるという方が優勢でした。調査では、再度「知」の総合化を生かした総合的な学習の時間の学習内容の一つとして、教科の学習の発展として総合的な学習の時間において学習を続けて行うという取り組みを見直し、その工夫例を探しています。

企画・研究グループ 教育調査チーム

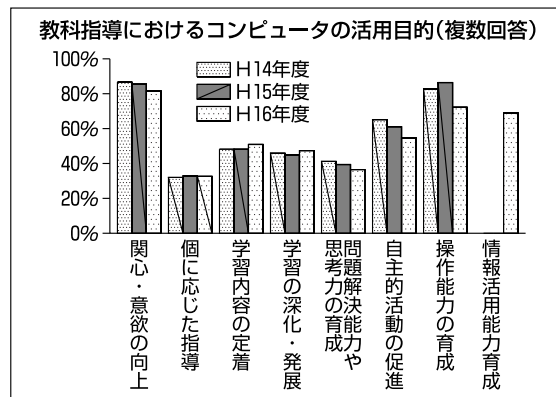
TEL 024-553-3141 (内線14)

e-mail: takizawa.reiko@yg34.fks.ed.jp

『福島県の情報教育の実態等に関する調査』結果報告

情報教育チームでは県内の公立学校における情報教育の実態等を把握するため、毎年この調査を実施しています。このたび今年度の結果がまとまりましたので、その一部を報告します。

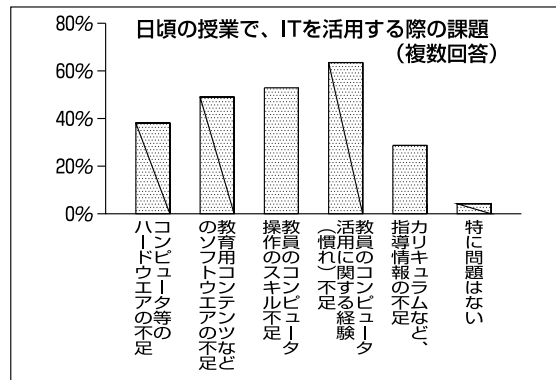
I 教科指導におけるコンピュータの活用目的



※H16年度より「情報活用能力育成」を選択肢に加えた。

「関心・意欲の向上」を目的とする活用が、この3年間、安定して高い割合を保っています。その一方で、「操作能力の育成」を目的とする活用が減少しました。

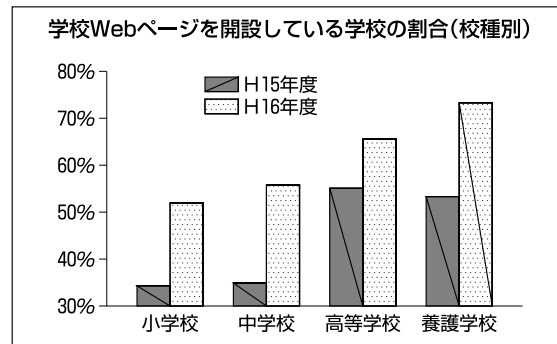
II 授業におけるIT活用の課題



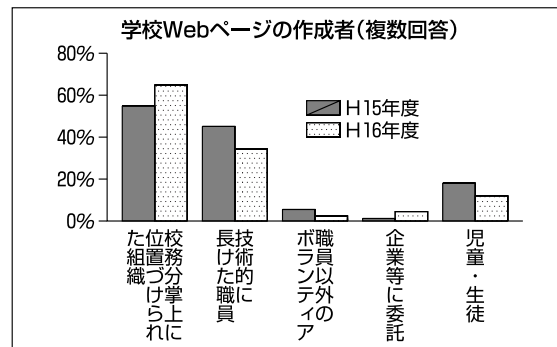
授業におけるIT活用の課題として多く挙げられたのは、「教員のコンピュータ活用に関する経験不足」、「教員のコンピュータ操作のスキル不足」といった、教員の経験やスキルに関連する項目でした。

III 学校Webページの開設状況

この1年間で、学校Webページを開設している学校が、どの校種でも大幅に増加しました。



また、「校務分掌上に位置づけられた組織」で作成している学校が全体の60%を越え、「技術的に長けた職員」、「児童・生徒」の割合が減少しています。各学校では、組織的に学校Webページを作成・運用するようになってきていることが分かります。



IV おわりに

これら以外の調査項目と詳しい分析結果は、教育センターWebページ

<http://www.center.fks.ed.jp/08joho/h16report.pdf>

に掲載していますので、ご覧ください。

この調査結果をもとに、情報教育研修の充実に努めてまいります。ご協力いただき、ありがとうございました。

チームでかかわる

～抱え込みから支え合いへ～

最近、子どもの気持ちが理解できない、子どもの示す多様性に対応しきれないと悩みながらも、自分一人でどうにかしなければという責任感や使命感をもつがゆえに、子どもたちへのかかわりに苦慮する教師が増えていると感じます。今回は、子どもへのよりよい援助のために、教師一人で抱え込まず、チームで支え合うかかわりについて一緒に考えていきましょう。

〈事例〉転校生がやってきた

時期はずれの転校生だった。9月も中旬になりかけた頃、転校の手続きのために母親と少女が来校した。少女の名はサキといい、小学校5年生である。手続きも終わらぬうちから、「お話ししたいことがあるんです。」

と母親は話を切り出した。サキは前の学校でいじめを受け、精神的に不安定になり病院に通っていたという。担任との折り合いも悪かったようで、母親の学校批判は延々と続いた。「とにかく、繊細な子なのできちんとかかわってほしいんです。」

担任となる香川先生(30代前半女性)は、母親の話を聞きながらも、目の前でゲームをやり続けているサキの様子が気になって仕方がなかった。



香川先生は、その日のうちに前の学校の担任へ電話し、詳しい情報を得ることにした。その中で、サキ自身も友達に暴力や暴言を繰

り返すなど対応の難しい子だと伝えられた。香川先生は内心大変な子を受け持つことになったと漠然とした不安を感じた。

「今度、隣の〇〇県から転校してきた五十嵐サキさんです。みんな、仲良くしてあげてね。」

転校当日より、母親からの電話が毎日のように鳴り続けることになった。他の子に嫌がらせを受けた、仲間に入れてもらえなかった等々。

初め、香川先生は、転校してきたばかりなのだからと、サキの言動を大目にみていた。しかし、他の子どもとサキのトラブルは増えていき、その対応に香川先生も疲れてきた。ただ、誰にも相談できず、悶々とする日々が続いていた。

サキは、毎日のように保健室に入出し、友達の悪口を言いふらしたり、掃除の時間になると腹痛を訴えて来室したりを繰り返していた。養護教諭の加藤先生はその都度注意をしたが、このままでは大きな問題が起これと考え、香川先生に声をかけてみた。

「今度転校してきたサキさん、どうですか?」「まだ転校して日も浅いので、慣れていないようですが・・・。」

香川先生は戸惑いの表情で答えた。

1 チーム援助への第一歩

養護教諭の加藤先生（教育相談係）は、他の先生からもサキの言動に関する情報が頻繁に入ってくるようになったので、定例の教育相談係の打ち合わせの場で思い切って、チーム援助の必要なケースとして複数の教師が協力してかわることを提案しました。

2 チームを組むことの効能

教師一人でやれることには限界があります。子どもを指導援助する際にも、組織の力を活用した方がよいケースが多く見られます。

複数の教職員でかわることは、

- ① 児童生徒理解が多角的に深まる
- ② 役割分担し幅広いかかわりが可能になる
- ③ 互いに支え合うことで負担が軽減される等の利点があります。

3 チーム援助による進め方

では、具体的には、どのようにチームを組み、どのような取り組みを進めていけばよいのでしょうか。

○ ステップ1 対等なパートナーとしての協力関係作り

学級担任（教科担任）のプライドを傷つけたら、依存関係が生じたりしないよう配慮することが大切です。**みんなで一緒に考えていこうという雰囲気**を作りましょう。チームに所属する教職員は、対等に相談し意見を出し合うことで、協力関係を深めていきます。

○ ステップ2 問題についての実態把握・資源発見

その児童生徒を理解し、援助するために必要な情報を収集します。まず、担任や保護者から、子どもに関して「心配なところ」「困っていると

ころ」を出してもらいます。次に、子どもの「得意なこと」や「好きなこと」を探し、その子自身の**自助資源**や周囲の**援助資源**に着目します。

※ 資源（リソース）

子どもの課題への取り組みや問題解決に援助的な機能をもつ人的資源や物的資源をさす。

○ ステップ3 援助目標や援助計画の作成

児童生徒の自助資源をどう生かし伸ばすか、チームの構成員の立場や能力をどう生かすか、校内の援助資源をどう活用するかに焦点を当てることは、解決の糸口につながります。その児童生徒のために**いま必要なこと**は何かを考え、**みんなで無理なくできる計画**を立てます。

○ ステップ4 役割分担の決定と援助活動

これから行う援助について「いつ」「誰が」「何を」行うのか等、具体的な活動を決定する必要があります。複数の援助者が共通理解を図りながら、**それぞれの得意な分野や立場を生かして**援助します。保護者や子どもの気持ちに寄り添い、誠意をもって対応することが肝心です。

○ ステップ5 援助活動の評価と見直し

状況の確認と新たな情報の収集を行い、援助活動の評価をします。**うまくいってることとうまくいっていないことを確認し**、援助の修正案を話し合います。

4 5つのステップを取り入れたチーム援助例

加藤先生は、日頃から先生方と、いつでも、どこでも、気軽に話せる雰囲気を大切にしていました。

〈対等なパートナーとしての協力関係作り〉

香川先生がたまたま怪我をした子を連れて保健室に来た際に、加藤先生は声をかけました。

加藤 香川先生、ちょっといいですか？

香川 はい、何でしょうか。

加藤 先生、最近疲れてませんか？何か困りごとでもあるんじゃないですか？

香川 えっ、……………。

加藤先生は、学年主任も実は心配していること、もし心配なことがあれば自分達が力になりたいと思っていることを率直に告げました。うっすら香川先生の目には涙がにじんでいました。しばらく沈黙が続いた後、香川先生は、堰を切ったように胸の内を話し始めました。

加藤先生と学年主任と香川先生の3人で、第1回チーム会議はスタートしました。

香川 実は、加藤先生に声をかけていただいた時、正直もう限界だと思ったんです。話を聞いていただいて、今まで張り詰めていたものが抜けていく感じでした。

加藤 何ができるかわからないけど、サキさんの援助に役立つことを一緒に考えていきましょう。

主任 私もできることをお手伝いします。

〈問題についての実態把握・資源発見〉

主任 サキさんは、どんなときに攻撃的になるのですか。

香川 うーん、クラスの男子とのやり取りの中が一番多いと思います。

主任 彼女自身、他の子の気持ちが分からないというのものもあるのじゃないかな。

加藤 表現の仕方が上手ではないよね。感情をそのままぶつけている感じ。

（中略）

加藤 ところで、サキさんの好きなことや得意なことは何ですか。

香川 図工と体育は好きみたいです。勉強は嫌いだと言ってますけど。

主任 本人はどんなことができているの？

香川 できていることですか？

初め「うまくいってないこと」「できていないこと」といった無いもの探しをしていましたが、途中から、「できていること」「少しでもうまくいったこと」に注意を向けていく方向で話し合いは続きました。例えば、攻撃的な話し方というのは、自己主張ができる能力とか、積極的にかかわる能力と捉え直せるのではないかと、本人のプラス面に目を向けることにしたのです。

〈援助目標や援助計画の作成〉

主任 サキさんに今必要なのは、適度な自己主張をしながら、いかにクラスのみんなと仲よく生活できるかじゃないのかな。

香川 そうですね。うまく他の子と関係がとれていないですよ。

加藤 いつも気持ちがイライラしている感じで不安定な面が気になるよね。

まず、サキさんの気持ちの安定を図ること、担任とサキさんの関係作りを再構築していくこと、本人のもつ積極性、行動力、自己主張できる面を活用し、上手に表現できる方法や相手の気持ちをくみ取る方法を提示していくことなどが援助方針として立てられました。また、保護者を支えることも方針に盛り込まれました。

〈役割分担の決定と援助活動〉

主任 今まで、どんなふうにかきさんにかかわってきたんですか。

香川 感情的になるので強く注意したり、叱責

したりはしてきませんでした。気持ちの落ち着いたところを見計らって、本人の言い分を聞いてから指導するといった手順で行ってきました。

加藤 落ち着いてから話をするっていいですね。彼女ははっきりと自分の言い分は話せるから、その話し方をどうするかね。

(中略)

加藤 じゃあ、役割分担を考えていきましょう。

香川 私もそうですが、彼女も体を動かすのが好きだから、休み時間に一緒に何か運動したり、話したりする時間を設けて、彼女との関係を作り直したいと思います。

主任 お母さんの都合を聞いて一度じっくりお話を聞く場をもっていいね。毎日電話攻撃では身がもたないものね。保護者面接では私も一緒に入りましょう。

加藤 私は、絵を描くのが好きなので、サキさんと一緒に絵やイラストを描きながら、話し方の練習もその時にしてみますね。

話し合いの最後には、「何を」「誰が」「いつ」を含めた具体的な活動を決定しました。また、次回のチーム会議は10日後に設定しました。

〈援助活動の評価と見直し〉

その後のチーム会議では、その都度うまくいっていること、うまくいっていないことを確認しながら、指導援助策を練り直しました。

香川先生は、チームで支えられている安心感の中、次第にサキさんへの見方が変わり、焦らずじっくりとかがわれるようになりました。

サキさん自身も、香川先生、加藤先生とのかわりを通して、まだ暴力や暴言がすっかりなくなったわけではありませんが、笑顔が見られるようになり、少しずつ落ち着いてきました。

また、母親も、学年主任からねぎらいの言葉を受けたり、本人の変化を感じたりする中で、協力的になり、電話の回数も減ってきました。



5 おわりに

今回は、チームで支え合いながら児童生徒にかかわる活動が「教育相談系の気付き」から始まりましたが、他にも「担任の気付き」「学年主任の気付き」「子ども・保護者からの依頼」等様々なルートからのスタートが考えられます。チームを組んでのかかわりは、担任を問題の抱え込みから救います。

まずは「個人だけでなく複数の教職員で児童生徒にかかわることの意義」を再確認し、実践に移すことが大切ではないでしょうか。

そのためにも、何かあったらではなく、日頃から些細なことでも気軽に話したり、相談したりできる関係や環境を作るよう心がけたいものです。

◇ 引用・参考文献

学校教育相談ハンドブック

福島県教育資料研究会編

チーム援助入門(学校心理学 実践編)

図書文化

新しい学校教育相談の在り方と進め方

ほんの森出版

特集

外部講師の講演から

教育センターで実施しているさまざまな研修では、多くの外部講師の講義・講演を行っています。

平成15年度から始めた聴講制度では、これらの外部講師の講演を聴くことができます。今年度は、91名の外部講師の講義・講演に対して、10月現在でのべ480名の先生方から聴講の申し込みがありました。「中央まで行かないと聴くことができなかった先生の講演を福島で聴けるのはうれしい。」という聴講者からの声もいただきました。

今回は、9名の外部講師の講義・講演の様子を紹介します。

教育相談実践講座

教師・援助者のための ソーシャル・スキル

都留文科大学大学院教授

河村 茂 雄

基礎講座を修了した実践講座として、河村先生の豊富な経験から、生徒指導のさまざまな事例とそれに対する具体的な対応の仕方が示された講義内容となりました。子どもたちだけでなく先生方に対しても、あたたかさを感じさせるとともにユーモアあふれる語り口で、研修の先生方も励まされることの多い講義でした。

〔講義の概要〕

1 ソーシャル・スキルとは

単純に言うと対人関係を営む技術のことです。意識して取り組めば変化する部分、例えば行動レベル、態度レベル、表情、そこに注目してより良い人間関係を築けるようにしていこうという技術なのです。

2 ソーシャル・スキルの背景

一番大きいことは、そういう技術は学習によ



って身に付くということです。スキルは、学習によって蓄積されていくんです。

次に、学習でやっていきますから、言語非言語、こういう言い方、こういう仕草というのがある程度明確化できます。何もしていないのにいじめられる子どもには、マイナスの攻撃行動(リアクションしない等)をとらないように教えてあげなくてはなりません。

もう1つ、ソーシャル・スキルは時代と地域性の影響を受けます。だから、これからの子どもたちには21世紀に生きる子どものスキルを教えなければなりません。この人だったらわかってくれるだろうという前提を持たない、自分の思いは相手に伝わるように適切に伝える表現能力を身に付けさせることです。

3 子どもとの関わりを変える3つのポイント

(1) 相手を的確に理解すること

ベテランの先生は、経験がマイナスに働いて持っている子供像が固まっていないか。また、子どもの輝かしい側面だけに引っ張られたり、教師自身の個人要因を意識できていなかったり、農に陥っていないか。

(2) 自分の思いを相手にわかるようにアレンジすること

現代の子どもたちの実態に対して、子どもたちが理解できるような言葉や態度に置き換えられているか。

(3) 適切に相手に伝えること

言語と非言語が矛盾していないか、今言っていることと日常生活に矛盾はないか。そして、一般論ではなく、「私はこう思うぞ。」というアイメッセージをちゃんと伝えられるかどうか。

教師の意識できていない部分の対応が問題を生起させている可能性があります。子どもとの関係が自然に良くなることはありません。二人の関係性にトラブルが生じているのだから、その子がだめなんだと断定する前に、教師側からやり方を変えてみる。これがポイントです。

4 子どもの実態に合った具体的な対応

「あきっぱく、がまんできない」「傷つくこと、失敗することを恐れ、新しいことに取り組もうとしない」といった現代の子どもたちの実態を、先生方は感じています。問題は、それを前提にして対応策をとっているかどうかです。我慢できない、単調な問題を嫌がる子どもに合わせた授業展開を考える。ほめる内容、ほめる時間は教師が意図的に作り出すんです。

こうなったら、これをする。こうなる前にこ

れをする。対応策をどれだけ持っているかがポイントです。叱る前に丁寧に教える。そして成長が見られたらその部分、その努力をほめる。成長が見られなくても続けていたら「よく頑張ってるね」と声かけをします。

5 現代の子どもたちをソーシャル・スキルの視点から理解する

子どもたちは学校に来て知らないうちに体験学習をし、あうんの呼吸を学習しています。対人関係のソーシャル・スキルを系統的に体験学習できる場は、学校ぐらいです。

小中高の授業の中で、交友関係や交流体験を学習させるというのが、これからの先生方の教育実践の中心になってくると思います。学級生活の中で対人関係を育てることが、発達につながってきます。人との交流を通して自己概念を形成していく。順調な発達をするために、より広くより深く対人関係をある程度計画的にやっていく。これが先生方に必要になったのです。

ソーシャル・スキルといっても特別のことを教えるのではなく、当たり前なことなんです。しかし、もうこれは当たり前ですませではだめなんです。確認しながら定着させていく。そうすることによって、そういうスキルがあるということがわかります。そして、他の子どもの受容力も高まります。

実践するときは、かかわりのスキルと配慮のスキルという2つの視点から子どもたちを見ていきます。スキルの視点で見ると、AD/HDの子も非行の子も軽い知的障害の子も、「この部分のスキルが欠けているんだな。だからどういふふうに体験学習させるか。」という視点から考えることができます。

生徒指導・特別活動担当者研修会

カウンセリングを生かした生徒中心の生徒指導

兵庫教育大学教授

上地安昭

学校カウンセリングという視点から生徒指導に取り組む上地先生の、福島県では初めての講義です。学級経営に自信を失った教師の事例を通して、カウンセリング・スキルの実話を話していただきました。

【講義の概要】

1 教師研修におけるカウンセリング学習の意義

生徒と先生は、コミュニケーションを基盤に成り立っています。個々の生徒が、言葉だけでなく表情や態度で投げかけてくる情報を、どれだけの確に受け止めるか。それが生徒指導だと思います。そして、先生方にとって大事なのは、先生の願い、思い、感情を、どう的確に40名の生徒に伝えるかということです。生徒指導では、「生徒はどう思うんだろう。」絶えず生徒の視点からものを見ることが必要です。

予防的開発的カウンセリングを行うには、非常勤のカウンセラーだけでは不十分で、教育相談の先生は、教師半分カウンセラー半分、教師カウンセラー的な役割を担うことが望まれます。

2 生徒指導における教師の基本的教育理念

子どもたちと関わるときは、善的に、前向きに捉えます。ピグマリオン効果というのがありますが、先生がこうなるんだと思った方向に子どもたちは行く可能性が高い。この子はよくな

ると期待していると、そういう関わり方をするのです。

個に注目して、一人の子に時間やエネルギーを注ぐことが、大事にされているという実感につながります。また、外見にとらわれず、内面に迫ることです。外見というのは、自分の中の葛藤が出てきます。なぜこの子は茶髪にしないと学校に来れないのか。遠回りかもしれないけれど、内面に注目しないと外見はかわってきません。人間は、理解すれば必ず理解してくれた人の思うような方向に変わってきます。

3 生徒指導におけるカウンセリング・スキルの基本

生徒を拒否せずに、受け入れることです。多忙なときでも、いきなり切るのではなく、君を受け入れる態度はあるのだということを残して対応します。

相手の内面に寄り添って、生徒や保護者の声を聞ければ、生徒指導はできていると言えます。相手の言葉を繰り返して、同じことを相手に返してやる。相手が勇気を持てるように返してあげることで、自分で気づくようになります。一生懸命聴く。治る治らないは、本人の力です。相手の気持ちを自分のものとして感じる、共感的態度も重要です。落ち込んで穴の底にいる人から見れば、「深い穴」ではなく「高い穴」なのです。

相手が間違ったりずるをしたりした時は、見逃してはいけません。事実から目をそらさずに直面させることもカウンセリングです。問題行動を指導するときも、すぐその場で、今、目の前の行動を話すことを心がけてください。生徒指導で一番効果があるのは、生徒が要求し、生徒が一番困っている時に、援助することです。

中学・高校を通した キャリア教育の在り方

東北大学大学院教授

菊池 武 克

発達心理学を専門とする菊池先生から、キャリア教育が求められる背景や定義、進路指導との関わりについて講義が行われました。

【講義の概要】

キャリアとは、それぞれの職業経験を通してその人がどう変わるか、その人の中にその職業に対応して蓄積される能力のことです。実際には、職業に就く前にもその連続があり、一連の流れとして考えていくのが、キャリアの考え方です。その流れの中で人が成長し、能力を高めていくプロセスを、職業的な発達、あるいはキャリア発達と呼びます。

アメリカのスーパーは、従来の職業のかわりにライフロール（役割）ということを言っています。職業というもひとつの重要な役割であり、我々は職業を持つことによって社会とのつながりを持つことができます。しかし、それ以外にも我々はいろいろな役割を果たしています。子ども、学生、余暇人、市民、労働者、家庭人。いわゆる「仕事」というのはこの中の労働者にあたるにすぎません。人がさまざまな役割をそれぞれの時期にどのように果たしていくかを、スーパーはライフキャリアと呼んでいます。

キャリア教育とは、何を中心にしながら自分の人生を送っていこうとするのか、きちんと考えていく中で、職業に限らず自分の生き方について主体的に取り組む子どもたちを育てていくことです。従来の進路指導と考えられていたように中高だけで行うのではなく、小・中・高と

継続して考えさせていく必要があります。それぞれの段階にふさわしい内容をやって、それをつなげていくことです。長い時間の経過を通して、一人一人が自分の職業を考えながら自分の生き方をだんだん現実感を持って考えることができるようにしていく。それに併せて自分自身の条件を整えていくことです。

生涯発達心理学の面からも、その人がどういう役割を自分のものとして果たしてきたのかということが、一人一人の人の人生であり、その人の成熟であると感じることができます。人生上の役割は人から与えられるのではなく、大事なことは、自分でそれを選んで自分でそれを実行して行くことです。職業や結婚相手を決めることが、その人のその後の経験を大きく変え、その後の発達を大きく決めることとなります。自分の役割をどう考えてどう選ぶのか。そういうことに関する態度や力を子どもたちに付けてやる、その時期に経験させるというのは、非常に大事なことです。

進路指導は、具体的な職業や学校だけを見るのではなく、そこを中心として全体を見ていくことが大変重要です。従来の進路指導はどちらかという進路決定を巡る進路相談が中心になっていますが、集団指導と個別指導、進路発達に関わる部分と進路決定に関わる部分、この4つの分野がまんべんなく行われること、むしろ進路発達の分野を従来以上に実施することが必要になります。また、キャリア発達に結びつけて考えなければならないこととして、人間関係形成能力、情報活用能力、将来設計能力、意志決定能力の4つがあります。それぞれの能力を小学生の時からずっと伸ばしていくことが必要になるでしょう。そういう力を伸ばしていくための学習プログラムや教育的な体験等が、これから考えられていかなければなりません。

学ぶ意欲を高める授業 教育心理学からのアプローチ

関東学院大学助教授

岩男 卓 実

岩男先生の専門である認知心理学を踏まえ、研修者の意欲を喚起する工夫がなされた講義が行われました。

【講義の概要】

1 内発的で个性的な学びへの意欲

教師の側からは何に対しても無気力ないように見える生徒も、自分自身が思いを寄せる「何か」については十分意欲的で、その多くは子どもの内側から自然とわき上がってくる内発的で个性的な意欲です。

内発的意欲の生まれるおおもとは、好奇心です。わかりきっているものや全く足がかりがないものではなく、ちょっとは知っていることが好奇心を駆り立てるということがわかっています。そして、特定の領域や対象に対する「知りたい、わかりたい、できない」という興味・関心が、何を学ぶかという what にあたるのに対して、こだわりは、その対象にどのように近づいていくかという how にあたります。

2 教室における内発的な意欲

教室ではあらかじめ多くのことが決められています。内発的意欲のメカニズムは、課題選択学習、課題設定学習のような自己決定環境を要求します。

「怒られるから。」「ゲームを買ってもらえるから。」こうした外発的意欲の最大の問題は、賞罰がなくなった瞬間に意欲が消えるだけでなく、その人が本来持っている内発的意欲をむしろ減らしてしまうことです。



外発的な意欲に頼らない対策は何かないのでしょうか。生徒が内発的意欲を持たない対象であっても、学習を進めていくうちにその世界のおもしろさを発見し、興味を持つことはよくあることです。これを価値の内面化と言います。価値の内面化を助けるのが分別です。外発的意欲は受け身ですが、分別に基づく意欲の場合には、おもしろくなるかもしれない、がんばってみようかなという、やや主体的な意欲です。分別の働きを促し、分別に基づく意欲を喚起するには、他者の存在が重要です。信頼している先生が大事なことだと言ったから、〇〇ちゃんがおもしろいと言ったから、もう少しがんばってみようと思う。分別に基づく学習意欲を持たせることができる場所に、学校の重要な意義があります。しかし、分別に基づく意欲は、内発的意欲よりも揺らぎやすいので、がんばればできるという、行動と結果の随伴性を感じられる学習環境、子どもが自分の成長を確かめることのできる絶対評価等、学校としてこれを支える必要があります。

ところが、意欲はあるように見えるのになかなか成績に結びつかない子どももいます。意欲と成績が結びつくには、達成の手段となる活動＝学習方略を行動レパートリーとして持っていて、その気になれば実行できる状態にあることが必要です。

生きる力をはぐくむ 特別活動

文部科学省教科調査官

杉田 洋

小学校における学級活動の授業の本質について、特別活動の重視を熱く語る杉田先生の姿勢が印象に残る講義が行われました。

【講義の概要】

1 なぜ、今「生きる力」か？

複雑な社会の中で、対人関係の未熟さや倫理観の欠如から、「友達・集団でいることはわずらわしい」「孤食の方が楽しい」という子どもが増えています。

思いやりや人間関係の大切さは、机の上だけで教えられるものではありません。「集団が楽しい」ということを教えるために、今こそ、特別活動が重視されなければなりません。

考えて、決めて、みんなで実行する学級生活はどこへ行ったのか。「学習あって生活なし」学習集団が生活集団であり、「学級って何？」という現状です。投票率が低いのは学校時代に特別活動が大切にされていないからとも言えます。集団の一員としての自覚や自主的・実践的な態度を育てることが必要です。

2 学級活動の特質と「生きる力」

特別活動は、生活を題材にし、対人関係をつくる力をはぐくむものです。学級活動の内容は、次の2つです。

内容(1) 学級会活動の流れをくむもの

社会的な実践力をはぐくむ活動で、集団で議題を解決するのが基本です。その際、教師がコントロールしてはいけません。

内容(2) 生徒指導の流れをくむもの

自己指導能力をはぐくむ活動で、個人で題

材を解決するのが基本です。実際は、自己決定に至らない授業が多いようです。

3 「望ましい集団活動を通す」ことの重要性

「個性重視」と「共生」のバランスをとり、集団活動は両刃の剣であることに留意します。

	課題達成機能	集団維持機能
集団	活動の成果、課題達成	集団の凝集度
個人	個人の活動への貢献度	個人の安定感

<有用感>みんなから必要だと思われているという主観	<無用感>みんなからいなくてもよいと思われている主観
<安定感>みんなから理解され、愛されているという主観	<不安定感>みんなから理解されず、嫌われているという主観

4 一連の体験を繰り返すことにより「生きる力」を育てる

2で述べた学級活動の内容(1)の授業では、

①学級の**共同**の問題を見つけ、②みんなで話し合い、③**集団**目標を決定して、④共同して実践し、⑤有用感や達成感を味わう

内容(2)の授業では、

①学級の**共通**の問題を見つけ、②みんなで話し合い、③**個人**目標を決定して、④**自分の意志**で実行し、⑤効力感を味わう

5 おわりに

具体的に努力することの大切さや「やればできる」という効力感を感じさせることが大切です。良い先生は、課題を与えるだけでなく、「がんばれ」という言葉を使わずに励ましや期待を示します。

学級活動の話し合い活動では、集団で1つに決定しなければなりません。これは、教科にはない機能です。違いや多様性を引き出し、これを乗り越えて1つに決めることが大切です。

「話し合い」は「聴き合い」なのです。何でも言い合える雰囲気、本音と本音がぶつけ合える学級づくりが求められます。

論理的思考力・表現力を育む 国語の授業について

日本言語技術教育学会会長

市毛 勝雄



研修者が実際に斉読やキーワード作文を行い、市毛先生から具体的に指導していただきました。リライト教材や、「作文の書き方」「どちらがじょうずかな」のプリントも提示され、実践的な講義となりました。

【講義の概要】

小論文とは、題材は日常生活から取材し、それを論理的構成にしたがって文章化したものです。論理的思考というのは、日常生活の中でやらなければなりません。「私の好きなもの」でいいんです。それを論理的構成で書くのが、論理的文章です。その小論文の評価基準は、科学的な論文構成を持っているかどうかです。構成がポイントです。

文学の文章と論文の文章は、全く違う文章です。論文の場合、単語は概念を提示する働きをし、段落はひとまとまりの事実・概念を示すものです。構成も、序論・本論・結論以外の形式は認められません。

論文の個性は、取り上げた事実・材料によって示されます。構成や文体は型どおりでいいんです。「昨日、縁日に行きました。お面を買ってもらいました。笛を買ってもらいました。嬉しかったです。」縁日に着目したのが子どもの個性なんです。お面と笛で縁日を象徴させているところが子どもの個性なんです。「子どもの喜びはどこにある。」と言う先生がいます。子どもの喜びはお面と笛にあるんです。事実によって思想を表現するというポイントを、「他にも何かあっ

たでしょう。」とかき回すのは、個性を殺すことです。先生は、「とても短くてよく分かる文章が書けました。」とほめてあげればいいんです。そういうことを何十回もやっているうちに、これだけではまずいなと思うようになる。子どもは自分で気がつくんです。そして、「隣の美代ちゃんに行きました。」というようになってくるんです。自分で気がつくように、先生は、形式を繰り返し教えていけばいいんです。

これからの説明文・論説文の指導は、小論文を書くための準備学習として、文章理解のために音読に習熟させ、基本的な性質・機能を教えます。論理的文章の基本形式は、

はじめ	文章全体のあらまし	10%
なか1	具体的事実の1	35%
なか2	具体的事実の2	35%
まとめ	具体例の共通性の抽出	10%
むすび	一般性の主張	10%

説明文をわかりやすく教えるためには、モデル的な形式を持った良い教材文が必要です。

小論文指導は、400字詰め原稿用紙を使います。段落間に線を引き、なか1・なか2・まとめを1語で書く、キーワード作文を書きます。キーワードは、短い方が全体を見たときにつながりがつきやすい。切り捨てるのが、論理的思考を育てます。キーワード作文を詳しく書いていくと、清書になっていきます。

基礎・基本を重視した 国語の授業

宮城教育大学教授

相澤秀夫

古典や説明的な文章について、教材研究の着眼点、一斉読みの指導、発問等、実際に研修者に投げかける、実践的な講義が行われました。

【講義の概要】

1 脳科学の研究から

東北大学の川島隆太教授は、読み書き計算という基礎的な学習が前頭前野を刺激し、子どもたちの脳を活性化させると言います。ただしこれだけをやればいいというのではなく、大事なのは読み書き計算をマテリアル（道具・教材）として、たとえば難しい単元に入ったときの準備運動として使うということです。

2 文化審議会答申から

これからの時代は、これまで以上に国語力が必要です。国語教育の在り方としては、社会全体の課題であるとし、言葉への信頼を教え、発達段階に応じた国語教育を考えることが有効だとしています。学校における国語教育の中では、「国語力は全ての教科で養われる。特にメモやノートを取ることは大事。」としています。これを阻害しているのがワークシートです。国語のノートは、自分の言葉で自分の思いを表現するのが基本ですから、作るものです。先生が整理したのを写すだけでは、自分で自分の言葉を使って思考することをしなくなります。

3 実際の教材に即して

古典は、下の注釈を当てはめて現代語訳するのが定番であるかのように指導されます。国語教育で大事なものは、母語です。母語だから読めばだいたい理解できる。母語教育であるという



認識が足りないから、英語と同じようにいちいち確かめるんです。母語教育で大事なものは、普段何気なく使っている言葉、文、文章に目を向けさせ、ひとつひとつの言葉の働き、言葉の形、言葉の力に対する気付き、発見を促していくことです。

古典によっては、いたずらに現代語訳させなくていい、基本的に現代語訳をつけるべきだというのが私の提案です。むしろ、言葉の気付きを基本にしていきます。すると、我々に問われてくるのは、我々自身の教材研究です。読みには質があるからです。

小学校1年生の入門期の文章でも、言葉を押さえ、論の展開を教える授業を見たことがあります。普段何気なく使っている言葉を子どもの前に提示して、言葉の使い分け、言葉の意味を考えさせます。その先生は、教材研究の段階でそこまで勉強していらっやっただけです。教材研究の場合には、文章それ自体の価値とそこに内在する教育的な価値を見出すことが求められます。

まず教材を押さえてください。教材をどれほど発見できるか。言葉を通してどう問いかけていくのか。その合間にいくら読みを入れるのか。1時間の授業の目標を実現するために、どこに提案を盛り込むのか。これが指導案づくりのポイントだと私は思います。

Practical Communication Theory and English Education from Sociolinguistic Perspectives

山形大学教授

山口常夫

英語を専門とする先生方を対象としていることから、講義のほとんどが英語で行われました。演習を通して、理論を実感できるよう工夫された講義でした。

【講義の概要】

今や英語は、第2外国語ではなくEIL（国際語としての英語）として考えられていて、差別への態度や政治的な妥当性という考え方が教科書にも反映しています。教科書にも載っているわけだから、そういうものの取り扱いにもっと気をつけていかなければならないわけです。我々教師は、経験でもって、教科書に載っている英語以上のものを授業に生かして、生徒たちに英語プラスαとして教えるべきです。

アメリカは、何かを言ったらことばで返せという文化です。Thank youと言ったらYou are welcome、I'm sorryと言ったらThat's OKと返すように、小さいときから教育されているわけです。何か言ったら返してくれないと不安なわけです。私のメッセージが届いていないのではないだろうか。英語を教えるということは、そういうルールまでも教えなければならない。それを教えていくのが先生方なのです。

私の専門でもあるNonverbal communication（非言語コミュニケーション）は、言語の半分以上を占めています。それは、どこにでも存在し、ことばに先行してあるいは伴っていて、ことばよりも正直なことが多い。だから、ことば



とともに教えなければならないものです。

Nonverbal communicationで最初に挙げられるのは、顔です。我々人間は感情の生き物ですから、感情をいかにコントロールし、いかに表すかで変わってきます。うなずきや笑い、ジェスチャーなどの行動、人と人の距離感、声の高低や抑揚、タッチング。これらは、文化によって、国によって、人によって異なりメッセージ性を持つものです。こうした文化の違いを理解していないと、異文化コミュニケーションは通用しません。

これからの英語は、Global Literacy（国際対話能力）という観点で、異文化コミュニケーションを成し遂げるために勉強していかなければなりません。そのためには、イギリス英語、アメリカ英語のみならず、さまざまな英語があるということを、まず我々は知っていなければなりません。さらに、Competence（言語能力）を確固たるものにするためには、言語を超えた非言語的な側面や異文化を理解をしていかななくてはならない。1冊の教科書を教えるとき、そこに現れているものを教えると同時に、教科書を超えて教えていく役割を我々教師は負っているのです。先生方が身をもって体験して、いろいろなソースやチャンネルを使って自分のスキーマを大きくする。そういう姿勢で、今後、臨んでいただきたいと思います。

小学校英語活動の新しい動き

文化女子大学講師
久 埜 百 合

「えいごリアン」をプロデュースした、久埜先生に、カードやパズル、絵本を使った英語活動をおりませで、子どもの実際に沿った観点から講義をしていただきました。

【講演の概要】

3、4年前は、歌ったりチャンツで踊ったりとにかく慣れ親しませることが実践されてきましたが、この1年くらいで「小学校英語の在り方」とか「どういう力をつければいいのか」という質問をいただくようになりました。教えているわけではないのだから覚えなくていいと言っても、子どもの方は身に付けていきます。英語を身に付けるということに対して、子どもには子どものイメージがあって、これでいいのか、子どもの方が不安になって、「もう遊ばなくていいから、ちゃんと説明して。」と言ってくるようになって、先生たちを悩ませているようです。

小学校で何年生から英語を始めるかというのは、大事なことだと思います。1年生でわかるわかり方と、6年生でわかるわかり方は、少し質が違います。1年生からやった方がいいのですが、それは6年生と同じことをやればいいのかということではなくて、各学年それなりのやり方があるということだと思います。覚え方が違うのです。外国人に対する子どもたちの反応を見ると、学ぶチャンスとしては、低学年の方があります。早く始めた方が、量に違いがあります。それが質にもつながってきて、文法の気づきにつながることもあるようです。どう気づかせるかが、授業をしていておもしろいところ

です

子どもは、意味のない練習というのはすぐ見破ります。意味のあることをきちんと選ばなければなりません。子どもたちは、引き出してみるとたくさんのことばを知っています。抽出したような英語で、ことばの仕組みを教えようとするから失敗するのであって、生活に密着した、子どもの知っていることをやればいい。カードを使うときも、ただ単語を繰り返すのではなくて、カードを使って何かをするという方向に持っていくのがいいと思っています。例えば、「スパイダー、モンキー……、How many legs?」というように、ただ与えられているものではなくて頭を使って考えることで英語が生きてくる。子どもたちはどういうふうにしてことばを覚え、英語を知ってるって思うようになるのかな。子どもたちが、「英語知ってる」と思うことが大事なんです。そのためには、知ってる単語でやればいいんです。わかったつもりにさせることが、1、2年生には勇気づけになるし、5、6年生になればセンテンスに興味を持つようになってくるのです。

集団で学ぶということは、塾では絶対真似できないことです。気づきというものが子どもそれぞれにあって、「あの子がこんなことに気がついた」というのが30人なり40人なりの共有の財産になるんですね。授業の素材を子どもからもらえるんです。知っていることばや身の回りのものを使った練習が、すくとんと腑に落ちて、子どもたちが「そうなんだよなあ」とつぶやいてくれる。気づきを高めることが大事です。

コミュニケーションを取りたいというのが、ことばの学びの始まりです。国際理解なんて大上段に構えるのではなく、ことばで不便を感じている人に対する優しさや、文化的背景についての尊敬の念を育てることで、いい雰囲気の中でことばを使えるようにすることが大切です。

……「人・道・歩み」……

緑あふれる生活を提案する

(有) 花 雅
渡部 キン子氏に聞く

磐梯山を望む猪苗代湖の近く、たくさんのハウスが並んでいます。年間150種300万ポット以上の花を生産し、緑を通して、生活空間を創造する楽しさを提案する、渡部キン子さんにお話を伺いました。

■花作りを始めたきっかけは……

水稲と蚕、たばこを栽培していた時、春先に空いているハウスでボランティアの花を作り始めました。「花いっぱい運動」がまだない、30年以上前のことです。兼業農家が始まる時代で、「お父さん、行ってらっしゃい。」「お帰りのさい。」という思いを込めて、婦人会で部落の出入りに花を植えました。その後、町の観光課の事業になって、「花いっぱい運動」は今も続いています。

■仕事を支えてきたものは……

花が好きということでしょう。初めてパンジーが咲いたとき、同じ葉っぱからいろいろな色の花が咲くことに感激しました。今も新しい品種の花が出ると作ってみたいくなります。それをみんなに好んで買ってもらう。お客さんが付いてくれるからできることです。

消費者の人に覚えてもらえるように、出荷するときポットに差すラベルも独自のものを作りました。かごトレイには、栽培法を書いた大きなラベルを付けています。

うちの花は、「見てください。」ではなく「植えてみてから見てください。」という花です。温度管理で姿形は良く育ちます。でも、市場ですばっと見える花でも、土が悪ければすぐだめになる。土と太陽の光には気を配ります。

花一つ一つの癖を覚えることも大切です。

余った苗は、教育委員会に連絡して学校に配布しています。ボランティアで始まった仕事なので、ボランティア精神は忘れないでいたいと思います。



■伝えたいことは……

学校で花を植えるとき、先生が植えるのではなく、子どもと一緒に植えてください。「花を植えたっけな。」という思い出になります。枯れてがっかりすることがあっても、それもひとつの経験です。

高校卒業してすぐ入社した子どもたちを見ると、花が咲いたときの感動もわからない。仕事の様子を見ても、先に立って働いたり、相手をいたわったりすることができません。でも、子どもたちばかりが悪いのではなく、子どもを育てられない環境にも問題があります。挨拶の仕方など常識的なことは、家庭で教えなければならないことです。社会に出るための一通りのことは、学校でも教えて欲しいと思います。うちでは、経験を積んだ人たちのグループに入れて、ほめながら育てることにしています。親が支援するときも、「おまえだけがつらいんじゃないんだからがんばれ。」と言ってください。

現在教育センターでは、9名の長期研究員が、豊かな教育実践に生かせる教育研究を念頭に、試行錯誤しながらも次のようなテーマで日々研鑽に励んでいます。

詳しい研究の成果については、平成17年3月に教育センターのWebページに掲載されます。

学校経営・運営に資する外部評価のあり方に関する実証的研究

吉永 雅也 (高等学校; 学校評価)

生きる力を育てる授業実践プログラム開発に関する研究

～高等学校における

ホームルーム活動を中心に～

佐竹 建城 (高等学校; 教育相談)

論理的思考力と表現力を高める指導

～メタ認知能力を高め、意欲的に学ぶ

児童を育てる国語科の指導～

佐藤 志学 (小学校; 国語科)

問題解決学習において自己評価能力を高める学習指導の工夫

～小学校社会科における単元シラバスの

活用を通して～

高橋 政喜 (小学校; 社会科・カリキュラム)

中学校社会科歴史分野において、思考力・表現力を育てる授業の工夫

～日常の授業に討論を取り入れた

学習活動を通して～

根本 顕治 (中学校; 社会科)

学習に対して自立し、確かな学力を身につけた生徒を育てる数学科指導のあり方

～学校、家庭の相互理解の深化と、

少人数学習の改善を通して～

山口 智 (中学校; 数学科、学校評価)

小学校社会科指導で活用できる「県内地域」の教材化に関する研究

～単元を通して活用できる副読本の作成～

増島 哲也 (小学校; 社会科、情報)

集団の一員としての自覚を深めるための教育相談の手法の効果的な活用の在り方

～「心をつなぐ集団活動」を通して～

村上 潤一 (小学校; 特別活動、教育相談)

作業的・体験的な学習を通して、地理的な見方・考え方を育てる学習指導のあり方

山崎 浩之 (中学校; 社会科)



職能研修から

教育センターでは、今年度、11の職能研修を実施しました。その中から、2つの講座の様子をお知らせします。

中・高進路指導研修会

期 日 / 6月28日(月)～29日(火)

参加者 / 進路指導主事 中学校35名

高等学校13名

この研修会は、平成13年度に「中学校進路指導主事研修会」として始まり、14年度から中高合同で実施しています。生徒が自らの生き方を考え、主体的に進路を選択することができるよう指導・援助する進路指導の在り方について研修を行いました。

●講演

「企業側からの新卒採用事情」と題して行われた、郡山法人会会長・東北乳運代表取締役社長の門馬真澄氏の講演では、企業が望む人材、教員への提言等についてお話しいただきました。

●中央研修報告

「平成16年度独立行政法人教員研修センター進路指導講座」に参加した、県立原町高等学校の小野田義和先生から、「キャリア教育」「キャリアカウンセリング」等について、貴重な資料をもとにした報告がなされました。

●実践報告

「本校における進路指導」と題し、熱塩加納村立会北中学校教頭の大堀昌弘先生から、学校の実態に応じた、保護者や地域を巻き込んだ取り組みが細部にわたって報告されました。中学校

の先生方から、「自校の取り組みの参考になる。」という感想を多くいただきました。

●研究協議

「進路指導の課題と対策」(校種別)、「中学・高校をつなぐ進路指導の在り方」(中高合同)の2つの研究協議を行いました。



《研修者の感想から》

- ・中高それぞれの立場から具体的な意見交換がなされ、有意義であった。中高が連携して行くにはこのような場が必要であり、それぞれの地域でも話し合う機会が必要であると感じた。
- ・「生き方・生きること」を学ぶ進路指導、キャリア教育は、学校教育全体においてもっと積極的に行わなければならないと痛感した。

東北大学教授 菊池武烈先生の講義は、19ページで紹介しています。

免許外教科担任教員研修会

期日／1班 5月12日(水)～14日(金)
2班 5月17日(月)～19日(水)

音楽、美術、技術、家庭の教科を免許外で担任している先生を対象に実施しています。今年度は、美術25名、技術31名、家庭36名の先生方が参加して、各教科の基礎・基本を押さえ、授業に生かせる実技中心の研修が行われました。

●美術

- ・デザイン実習(平面構成・レタリング)
- ・総合造形(ロボットの手) 等



《研修者の感想から》

美術は苦手な教科だったので、今回の研修についていけるのか、始めは不安でした。しかし、ひとつひとつ作り上げるたびに、中学生時代に味わうことのできなかつた「作る楽しさ」を感じることができました。

最も不安だった評価の仕方も具体的に教えていただき、評価を意識した授業の組み立てを学校に戻ってから実践したいと思います。

●技術

- ・木材や金属を材料とした題材の開発と電気

- 部品を用いた教材教具の作成
- ・ソフトウェアの活用、Webページの制作

等



《研修者の感想から》

免許外教科をこれから指導していく上での不安が取り除かれた。実習を通して、安全面や学習面での具体的な指導のしかたがわかってたいへん有益だった。技術・家庭科は、生徒が自立した生活を送れるように必要な知識や技能を教える教科であり、全教科を統合する働きを持っていることもわかった。明日からの授業に生かせることばかりであった。

●家庭

- ・衣服の手入れや日常食の調理の実習
- ・遊び道具の製作 等

《研修者の感想から》

豊富なテキスト、特に実践資料を見て、授業の実際が見えてくるようでした。授業に即活用できそうのためになりました。また、実習を通して指導の見通しを持つことができた点も良かったです。研修前と比べて、教科担当に対し、希望と意欲を見出すことができたような気がします。



ガーナの子どもたちから学ぶこと ～共に生きる力～

教科教育チーム 指導主事 黒川佳子

先生が日本から来てくれたので、私たちは刺繍や編み物を勉強することができました。だから、日本の高校生の皆さん、どうか一生懸命勉強してください。私たちも一生懸命勉強します。そして、いつか勉強したことをお互いに教え合いましょう。

これは2001年6月22日、私が西アフリカガーナ共和国のボルガタンガ女性訓練所を去る日に、一人の生徒が日本の高校生へのメッセージとして語った言葉です。不便で貧しい国に住む若者が便利で豊かな国の若者に送ったあまりにも美しい言葉として、私の記憶に強烈に焼きついています。

私がガーナに滞在したのは1999年7月からの2年間で、ガーナ北部ボルガタンガ市の職業訓練校で手芸指導を担当するためでした。この地域は高温と激しい乾燥の厳しい気候条件と首都から遠く離れた地理的条件のため、ガーナの中でも貧しい地域で、私にとっては、生活することは本当はとても大変なことなのだ、という当たり前のことを発見した土地となりました。

共同井戸での水汲み、炭をおこしての炊事、食料を確保するための家畜の世話や解体・畑仕事、盥での洗濯、草を束ねて作った箒での掃除等はガーナでは当たり前の仕事ですが、日本ではやる必要がないか、ちょっとひねったりスイッチを入れるだけの労力ですむものばかりです。とりわけ水汲みは、遠い井戸から水のたっぷり入った大きな盥を運んでこなければならない重

労働です。生徒たちはいつも「先生の家の水汲みは大丈夫か？手伝いに行こうか？」と心配していたっけ……。ちなみに、私の家はVIPが住むエリアに隣接し、長時間断水することがめったにない水道付きのガーナではまれに見る恵まれた住まいでした。そのため、共同井戸が枯れると近所の人々の水汲み場となり、そのときの水道代の高かったこと……。

このような厳しい生活環境を生き抜くために、ガーナの人々は誰でも助け合い、困難を克服しようと工夫し、力強く生きているのです。当然のことながら子どもたちは重要な労働力です。だから、年上の子どもを中心に、子どもたち同士で仕事を教え合い、弱い子や小さい子を助けながら必死に生活に必要な物を作り出したり、家畜を育てたり、畑仕事や家事のし方を考えたりと、私たちが求めてやまない「共生」の精神と「生きる力」を生活の中から身に付けていくのです。そしてこのことが冒頭の日本の生徒へのメッセージとして表現されることとなるのです。

「共に生きる力」が生活を通しガーナの子どもたちに身に付いているのを見れば、日本の子どもたちに「生きる力」を付けるための学習活動がどうあるべきかはおのずと見えてきます。「生きる」という切実な課題に立ち向かうのと同様の学ぶ必然性を教室の中で見付け出すこと、これを手助けするのが生活するのに努力を要さない、便利な国の教師に託された大きな使命なのでしょう。

英語の美しい花を大きく咲かせるために

A natural approach to learning English in Japanese Elementary Schools

大熊町教育委員会英語指導助手 **根本 アリソン**

相馬市教育委員会社会教育主事(前大熊町立熊町小学校教諭) **木村 恵子**

1 英語活動とのかかわり

木村：現在小学校の英語活動が注目されています。

国際的な視野に立ったとき、子どもたちにこれからどんな力を育てていくことが必要なのか改めて考える時期にきているのではないのでしょうか。また、昨年双葉郡英語活動研究会を立ち上げ、双葉郡の先生方と英語活動のあり方について研究を進めているところです。今日はアリソンに、A.L.T.として英語活動に関わるようになった経緯を聞きたいと思います。

Alison：私は、イギリスの小学校教師の免許を取得してから、平成元年にJ.E.T.プログラムでA.L.T.として来日しました。原町市での最初のA.L.T.として中学校でT2として英語の授業に関わりましたが、それから15年間相双地区で英語教育の仕事をしています。今から6年前に大熊町大熊中学校の英語指導助手として、さらに2年前から町内の2つの小学校で英語活動を担当しています。熊町小学校で木村先生と出会って共に英語活動のあり方について考えることができました。

2 大熊町における英語活動の実態

木村：県内でも大熊町は英語活動が進んでいる地

区と言われていますが、今どれくらいの時間を担当していますか。



Alison：現在1年生から6年生まで英語活動を行っています。低学年は年間10～15時間、中学年は20～25時間、高学年は25～30時間です。

木村：ずいぶん時間をかけていますが、その積み重ねによる成果を何か感じますか？

Alison：本格的に英語活動を始めてまだ数年ですが、“**Good morning, Alison. How are you?**”と子供たちの元気なあいさつ。休み時間には、廊下で自分の絵を指しながら“**What’s this?**”と質問。“**It’s a fish.**”と答えると、“**That’s right.**”と子供は大喜び。お昼が近づくと、給食を準備しながら“**Are you hungry?**”と子ども同士で楽しそうに会話。帰りも“**Goodbye, Alison.**” “**See you.**”

とさわやかなあいさつが見られるようになりました。

木村：英語があふれてきている感じですね。自分の考えや思いを伝えるコミュニケーションの手段としての英語力の向上が感じられますね。さて、英語活動を実践しているときに心がけていることは何ですか？

3 Natural Approach 英語活動の進め方

Alison：大きな花を咲かせるプロセスと似ているのですが、小さな種に、水をたっぷり与え、養分と適切な温度を与える必要があります。芽がでたら、それを大事に守っていかねば、素敵な花を咲かせることはできません。子どもたちの学びと心も同じです。水は「ナチュラルな英語の音」養分は「勇気づけと信頼できる教師」温度は「教材と教室環境」と置き換えて考えることができます。

木村：英語については大人の多くが「10年間習っても話せるようにならなかった。」と暗いイメージをもっています。私たちはとかく自分が学んできた英語の授業を繰り返しがちですが、小学校の英語活動は、できるだけ自然な形で子供たちが英語に触れさせることが大切です。文部科学省は、平成13年版「小学校英語活動の手引き」の中で児童のモチベーションを高めながら英語に慣れ親しめるように進めることが重要だと強調しています。

アリソンが最も大事にしている「ナチュラル」ということについて詳しく説明してください。

Alison：私は外国語を自然に学ぶ上で、3つの大

きい段階があるように思います。

第1のステージはインプット、入力段階。たくさんの音と言葉のシャワーの段階です。音の波や口の形をまねしながら、五感を働かせて言葉を獲得していくのです。低学年ではこのステージが授業の基本となります。歌・ゲーム・ダンスなどの楽しい活動を通して英語が身近で親しみのあるものであると感じさせます。

第二ステージはinteraction(相互作用)の段階。少しずつ児童同士のコミュニケーションを進めます。中学年では“apple”の単語だけではなく、“Do you like apples?”と文が言えるような場面設定をします。子ども同士のリラックスした関係の中で、インプットしたものを繰り返し使って初歩的なコミュニケーションをするという相互作用の活動をしていくことになります。

第三ステージはアウトプット、言語を生み出す段階。5・6年生では児童同士での会話を発展させながら始めて会った人とも、コミュニケーションがとれるような力を育てていくのです。

木村：もうひとつ、言語習得のプロセスを母国語の自然習得過程に近づけることも重要です。



まず、Listening、Speaking 音声を重視し、たっぷり音のシャワーを浴びさせた後にReading、Writingと進めていくべきです。

もちろん、子どもたちの生活経験・他の教科の内容・行事に沿ったトピックスを選んでいくこともナチュラルの1つのポイントですね。

そのように進めていくと6年後にどんな子どもに育ちますか？

Alison：例えば大熊町の姉妹都市から来た交換留学生との交流活動でも自信を持って、挨拶や自己紹介をしたり、“What season do you like?”などの質問をしたりすることができる子が育ってきています。



木村：英語活動で着実に子どもたちの力がついているということですね。子どもに優しいナチュラルな学びということは、プロセスだけでなく、学習環境にも関係しますね。

4 学習環境のあり方

Alison：そうです。では次に熊町小学校で木村先生といっしょに考えた「ワールドルーム」について話しましょう。

木村：「ワールドルーム」は熊小の「どこでもドア」だと思うのです。あの部屋に一步入ると、そこは別世界。児童も担任の先生も、いつもの世界から英語の世界へと気持ちの切りかえが出来るのです。カラフルでリアルな空間は子どもを英語の世界へ誘い、英語への興味をかき立て、異文化への視野を広げます。

Alison：教材の宝庫です。ぬいぐるみ、絵本、C.D.、ビデオ、ピクチャーカード、時計、プラスチック果物、野菜、ゲーム、パズル、おもちゃのお金、教師用指導書など、テーマごとにロッカーに整理されているので便利です。活動重視の学習ですから、これらのリアルな教材は必要不可欠です。



5 英語活動を進めようとしている先生方へ

木村：最後にこれから、英語活動をすすめようとしている先生方に何かアドバイスをお願いします。

Alison：まず、教師自身が英語活動を楽しむこと。英語力はあまり関係ありません。まちがってもいいのです。チャレンジする意欲が大事です。子どもたちと共に学ぶ心すなわちOpen mindが何より大事です。教えるのではなく子どもの視点から活動を組み立てていくことです。

Enjoy your lessons with the children taking their first steps communicating in another language.

※ お2人を講師として実施した「小学校英語指導者講座」の様子を、6ページで紹介しています。

授業に生きる 資料

中学校・高等学校における 入門期の漢文指導の工夫

教科教育チーム 指導主事 中根 猛

1. はじめに

中学校・高等学校における入門期の漢文指導について重要なことは、次の2つのことである。

- 訓読に必要な基礎的事項について指導すること。
 - 漢文特有のリズムを感じとらせること。
- そこで、^{注1}「漢文入門マグネット式ワーク」と、^{注2}「寺子屋『あだち塾』の音訓式素読」を柱にした指導方法を提案したい。

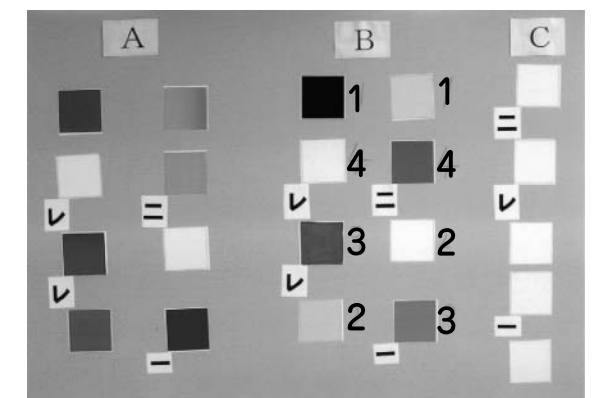
2. レ点・一二点の訓読指導

訓読の基本であるレ点や一二点の指導をする。これを「漢文入門マグネット式ワーク」で指導する。準備するものは、

- ①色をつけた四角のマグネットシート。A4判のマグネットシートを六等分して印刷する。
 - ②レ点、一二点を印刷したマグネットシート
- まず、①のカラーシートを使って、レ点・一二点の訓読の方法を指導する。各色は漢字に相当すると説明して、「最初に読むのは、どの色のシートか」と問えばよい。(写真Aを参照)その後で全員で訓読の順番に色を言わせる。同時にカラーシートのわきに訓読の順番を板書していく。(写真Bを参照)学習者全員が一斉に色で順番を言うことができる。ズバリ、色で答えられるから一目瞭然である。

次に、練習をする。黒板に写真Cのような問題を書き、答えさせる。生徒には、ワークシー

トを配付し、机間指導しながらわからない生徒に個別指導をする。レ点を指導してから、一二点の指導を行う。その次にレ点と一二点の組み合わせへと発展させていく。



このカラーシート作りには、様々な方法が考えられるが、マグネットシートに印刷するのが最適である。色紙だけでは、くり返しの使用には耐えられない。画用紙に色紙をはるとのりで紙が反り返ってしまい黒板にはれない。

3. 素読の指導

(1) 漢詩の場合

漢詩の指導で大切にしたいのが、リズムと韻のひびきを味わわせることである。このために、直読(すべて漢字音で読むお経読み)と訓読で交互に読む「あだち塾」音訓式素読を行うのである。この時に、黒板には白文の漢詩を模造紙に書いてはっておく。指示棒等で直読・訓読部分を示しながらすすめていく。

「春暁」の場合は、以下のように指導する。

春暁「シュンギョウ」(直読)→「春のあかつき」(訓読)を教師の後について、生徒が読んでいく。直読と訓読をサンドイッチ式に読むことで、漢詩本来の韻のひびきやリズムを味わうことができるのである。

春暁	シュンギョウ	→	春のあかつき
春眠不覚暁	シュンミンフカクギョウ	→	春眠暁を覚えず
処処聞啼鳥	ショショブンテイチョウ	→	処処啼鳥を聞く
夜来風雨声	ヤライフウウセイ	→	夜来風雨の声
花落知多少	カラクチタショウ	→	花落つること知る多少

直読のあいまいさと訓読の意味の明確さが、音読する生徒の脳を活性化させるのである。単調な訓読練習に変化をあたえ、興味をもって反復練習を行うことができるようになる。さらに押韻についても、自ずから感得させられるのである。

この訓読練習を十分に行った後に、漢詩を白文でノートに視写させる。直読でたっぷり音読した生徒は、教科書を見なくてもノートに書けるようになっているはずである。その後、起・承・転・結や一句の中での二字と三字の意味のまとまりに気づかせながら、情景や心情を想像させる。発展学習として、四行詩に書きなおしてみるという課題も考えられる。

(2)『論語』の場合

直読(音読み)と訓読のサンドイッチ式の読みで『論語』の指導を試みよう。「子曰学而時習え」で始まる「学而編」の読みを「あだち塾」の音訓式素読で練習する。

子曰、シエツ	→	子曰く
学而時習之、ガクジジシュウシ	→	学びて時に之を習う
不亦説乎、フエキエツコ	→	亦た説ばしからずや。

この時に、説はセツではなく、エツなのかという疑問がでると予想される。素読の段階であるので、「説は悦に同じ」という教科書の脚注程度でおさえたい。

音訓式素読をたっぷりおこなった後、漢文を視写させたい。直読で唱えつつノートに視写することで、置き字の存在や働きに気づかせることができるのである。

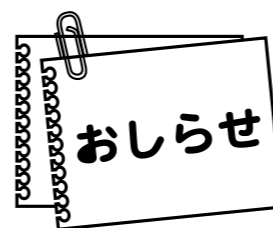
4. まとめ

漢文指導の基礎は、声に出して読む直読と訓読のくり返しである。教室が一体となって、声を出して、訓読の順番を確認したり、漢詩や漢文を直読と訓読で読むことは、単調になりがちな漢文訓読の基礎指導に、生徒たちをあきさせずに取りくませることができる有効な指導方法となるはずである。そして、声がひびき合う国語教室が実現する。

〈参考文献・参考URL〉

注1 漢文入門マグネット式ワーク
<http://www5a.biglobe.ne.jp/~monami/kanbnyum.htm>

注2 「脳と音読」P135~P142
講談社現代新書 川島隆太・安達忠夫



実践に役立つ教育資料

—最近の研究紀要・資料から—

今回は、センターで受け入れた研究紀要や教育資料から、教育研究や教育実践に役立つ資料をいくつか紹介します。

実践的な学校評価のすすめ方 [第2版]

沖縄県立総合教育センター(2004年2月)

学校の当面する課題を重点化し、その克服に向け学校がどのように取り組み、取り組んだ結果、どのように変化したかを明らかにするための学校評価の手法がまとめられています。

指導方法の工夫改善による教育効果に関する比較調査研究

—授業法の違いが児童生徒の学力、興味・関心・意欲及び学習態度の形成に及ぼす教育効果について(第二次・最終報告書)—

国立教育政策研究所初等中等教育研究部(2004年3月)

少人数指導法等の授業法の違いが、児童生徒の学力、学習及び生活に及ぼす教育効果に関して比較研究調査を行い、その調査結果が報告されています。

「社会性の基礎」を育む「交流活動」・「体験活動」—「人とかかわる喜び」をもつ児童生徒に—

国立教育政策研究所生徒指導研究センター(2004年3月)

平成12年度に発足した「少年の問題行動等に関する調査研究協力者会」による報告書『心と行動のネットワーク—心のサインを見逃すな、「情報連携」から「行動連携」へ—』(平成13年4月)を受け、児童生徒の社会性を育む教育を展開するうえで役に立つ、意図的・計画的な生徒指導の取り組み(生徒指導プログラム)の開発を目的として研究した3年間の成果がまとめられています。

小学校・中学校・高等学校における総合的な学習の時間 全体計画の考え方&具体的な展開

福岡県教育委員会・福岡県教育センター(2004年2月)

総合的な学習の時間の一層の充実と発展を目指し、各学校の総合的な学習の時間の全体計画の作成とその考え方を中心に編集されています。全体計画を作成する上で必要な資質・能力と学習内容を小・中・高等学校の発達段階に応じて明記してあります。また、全体計画を具現化するための年間指導計画の作成の仕方や児童生徒一人一人のよさや伸びを見取る評価の考え方についても示されています。

※ ここで紹介した以外にも多くの研究紀要や教育資料がありますので、ぜひご活用ください。

平成16年度

福島県教育研究発表大会のご案内(第1次)

ふくしまの“まなび”を共に創ってみませんか？

■趣 旨

福島県内の公立義務教育諸学校及び県立学校における教員のすぐれた研究に対し発表の機会を設けるとともに、福島県教育センターの研究成果を発表し、本県学校教育の向上に資する。

■主 催

福島県教育センター

■後 援

福島県小学校長会

福島県中学校長会

福島県高等学校長協会

■期 日

平成17年2月10日(木)

■会 場

福島県文化センター

福島市音楽堂

■講 演

「組織マネジメントから考える わが校の特色づくり」

講師 学校法人産業能率大学
教育・コンサルティング部主任研究員

浅野良一先生

■研究発表

(学校、グループ、個人研究)

【全体会】

・小学校、中学校、高等学校、盲・聾・養護学校研究発表

・教育センター研究発表

【分科会】

・小学校、中学校、高等学校、盲・聾・養護学校研究発表

・教育センター研究発表

■日 程

9:35	(9:15 受付開始)
9:50	開 会 行 事
11:10	講 演 会 【講師 浅野良一先生】
11:20	休 憩
12:10	全 体 会 発 表
13:10	昼 食 ・ 移 動
15:45	分 科 会 第1分科会 学校評価 教科外教育 第2分科会 生徒指導 教育相談 第3分科会 情報教育 情報化推進 第4分科会 教科教育 第5分科会 カリキュラム開発
15:45	閉 会

※ 詳細については、第2次案内でお知らせします。

【問い合わせ先】

福島県教育センター 企画振興チーム
(TEL. 024-553-3141 内線31)